

富山市埋蔵文化財調査報告40

富山市<sup>はっかやま</sup>八ヶ山A遺跡  
発掘調査報告書

—基幹農道(呉羽和合4期地区)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2010

富山市教育委員会

富山市<sup>はっ か やま</sup>八ヶ山A遺跡  
発掘調査報告書

—基幹農道(呉羽和合4期地区)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2010

富山市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は富山<sup>トヨカミ</sup>市八ヶ山<sup>ヤツタケヤマ</sup>山地区の八ヶ山A遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、富山県（農林水産部農村環境課）が事業主体となる県営農免農道（呉羽和合4期地区）整備事業に伴うものである。富山県富山農林振興センター農村整備第二課の依頼を受けて、平成21年度に富山市教育委員会の監理のもとに、北陸航測株式会社にて委託して実施した。
- 3 現地発掘調査・整理作業期間及び発掘調査面積・調査担当者は、次の通りである。  
発掘作業：平成21年8月24日～平成21年9月24日  
発掘調査面積：285㎡  
担当：北陸航測株式会社 朝田 要、稲垣 裕二  
（監理：富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 鹿島 昌也）  
整理等作業：平成22年1月5日～平成22年3月24日  
担当：北陸航測株式会社 朝田 要  
（監理：富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 鹿島 昌也）
- 4 現地における理化学分析は、ボーリング調査を中部地質株式会社に、自然科学分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その成果を第IV章に掲載した。
- 5 出土遺物及び原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。
- 6 本書の執筆は、第I章を鹿島が、その他を朝田が担当した。編集は朝田が担当した。

## 凡 例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系第VII系に基づき、設定したものである。方位は真北、水平基準は海拔である。
- 2 遺構の表記は以下のとおりである。  
溝：SD、井戸：SE、土坑：SK、ピット：P

## 目 次

第I章 経過	1
第II章 遺跡の位置と環境	2
第III章 調査の成果	3
第IV章 理化学分析	12
第V章 総括	21
引用・参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

## 第I章 経 過

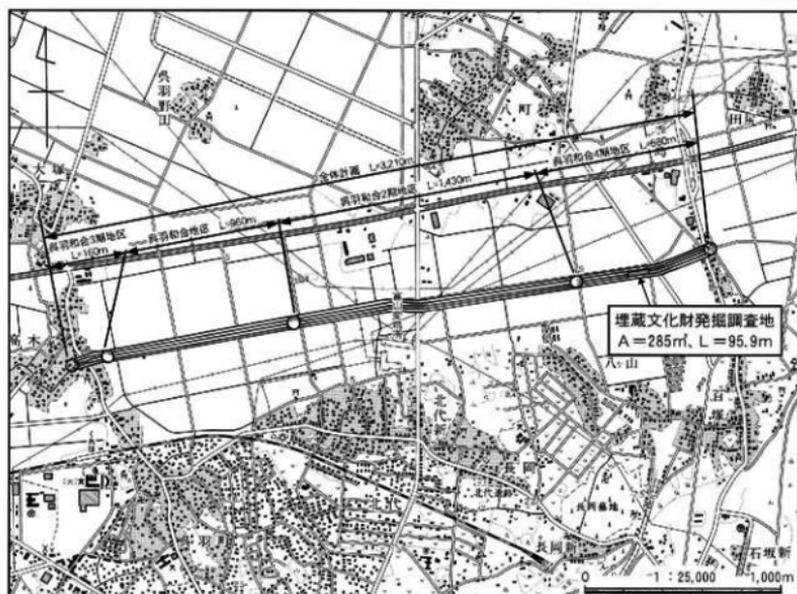
富山市呉羽和合地区（高木～寺島地内）で農免農道（平成21年度から基幹農道）を整備する計画が、富山県農林水産部農村環境課より平成8年に立案され、平成12年に実施採択された。流通機構の合理化並びに農村環境の改善を図ることを目的とする。国道8号線の南側約500mに位置し、東西方向に並走する農道である。西は県道中沖・呉羽線、東は主要地方道富山八尾線と交差し、総延長は3,210mである。計画線上に八町Ⅱ遺跡やハヶ山A遺跡、百塚住吉D遺跡が所在する。

平成13～19年度にかけて、呉羽和合2期地区（延長1,430m）の区間で、八町Ⅱ遺跡にかかる試掘調査及び発掘調査（5,700㎡）、出土品整理・報告書作成を実施した（2008富山市教育委員会）。

平成19年10月29日～11月27日（実働4日間）にかけて、呉羽和合4期地区（延長660m）の区間のうち、ハヶ山A遺跡の埋蔵文化財包蔵地にかかる試掘調査を延長370.6m、5,130㎡を対象に実施した。その結果、延長95.9m、1,140㎡に遺跡の所在を確認した。道路改良に伴う標準断面図と、埋蔵文化財が所在する高さに保護層を加えた掘削制限高を調整した結果、285㎡の範囲について発掘調査による保護措置を要することとなった。

平成20年度の用地買収を経て、平成21年度に発掘調査に着手することとなった。発掘調査は富山県富山農林振興センター農村整備第二課から依頼を受け、富山市教育委員会が監理を行いながら、民間発掘調査機関に調査及び出土品整理事業を委託して実施し、平成22年3月に報告書を刊行した。

（鹿島）

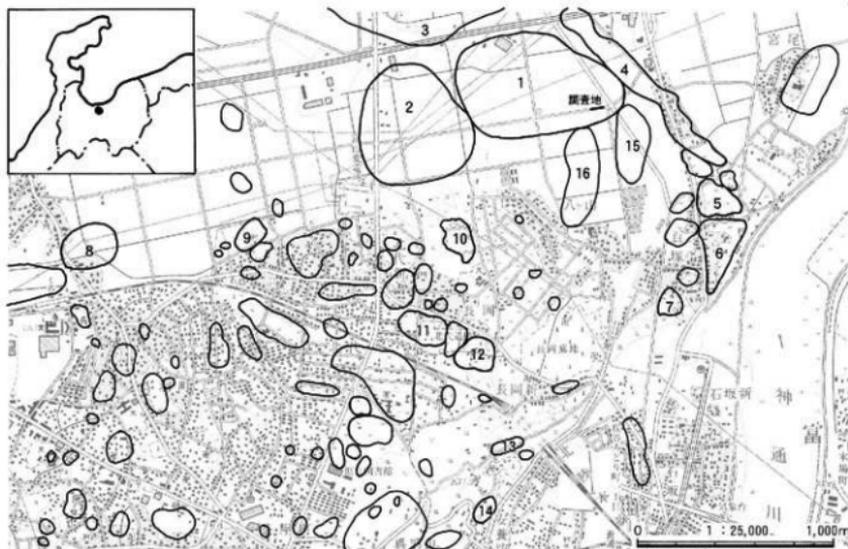


第1図 呉羽和合第4期地区計画一般平面図（国土地理院1：25,000富山の一部を使用）

## 第二章 遺跡の位置と環境

ハヶ山A遺跡は現在の神通川から約2km西にある呉羽山丘陵西側に広がる射水平野の東端、標高5～6mの微高地上に立地し、東側に流れる神通川からは約1kmの距離にある。神通川は洪水によって流路が大きく変遷しており、江戸時代前期にあたる1658年から1668年、本流が西から東に大きく移っている。遺跡の北西は縄文時代中期以降の海退によって古放生津潟が形成され、そこに流れ込む川で運ばれた土砂が堆積することにより中世～近世には低湿地帯が形成された。一方、この地域一帯は洪水の被害が大きく、江戸時代、水害に悩まされた住民による鍛冶川から分岐する新堀川の開削、神通川を水源とする牛ヶ首用水などの開削とそれに伴う農地の新開が文献にみられる。一方、当遺跡の北西約10kmに位置する放生津は、中世期を通して港湾施設が整備され、日本海海運の進展に伴って発展した。本遺跡の当該期である13世紀後半から14世紀前半は、北条得宗家による日本海沿岸港湾の掌握が推進された時期である。

本遺跡の周辺には縄文時代から近世までの多数の遺跡が確認されている。代表的なものとしては、縄文時代の小竹貝塚（日本海側最大級）や北代遺跡（国史跡）、弥生～古墳時代の江代割遺跡（大規模集落）や杉谷古墳群（四隅突出型墳丘墓）、古代の長岡杉林遺跡、中世の打出遺跡（鎌倉～室町時代の屋敷跡）などがある。本遺跡周辺の近年の調査では、南西に位置する小竹貝塚で従来不明であった居住域が確認された。南東に位置する百塚遺跡では、弥生から古墳時代の墳墓が19基確認され、移行期における墓制の在り方を考える上で重要な資料となる。また中世岩瀬湊の港町と推定される四方



第2図 ハヶ山A遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院1：25,000富山の一部を使用）

- |            |            |           |             |            |
|------------|------------|-----------|-------------|------------|
| 1. ハヶ山A遺跡  | 2. ハヶ山B遺跡  | 3. 今市遺跡   | 4. 百塚住吉D遺跡  | 5. 百塚住吉遺跡  |
| 6. 百塚遺跡    | 7. ハヶ山遺跡   | 8. 小竹貝塚   | 9. 蛭ヶ森貝塚    | 10. 長岡八町遺跡 |
| 11. 北代遺跡   | 12. 長岡杉林遺跡 | 13. 杉坂古墳群 | 14. 番神山横穴墓群 | 15. ハヶ山B遺跡 |
| 16. ハヶ山C遺跡 |            |           |             |            |

北竈遺跡では、掘立柱建物や畑などとともに側溝を有する道路跡が確認されている。

本遺跡の西南0.5kmに所在する八町Ⅱ遺跡では、古墳時代前期～中期および鎌倉～室町時代の集落跡が確認された。特に中世においては、八町地内と呉野町および北代一帯が南北朝・室町時代の京都卜社の神社領「寒江庄」に該当することから、当時の中核的な集落である可能性が指摘されており、それを証明するように、鎌倉から取り寄せた千鳥紋を施した高級漆器が出土している。

## 第三章 調査の成果

### 1. 調査概要

#### (1) 調査の方法

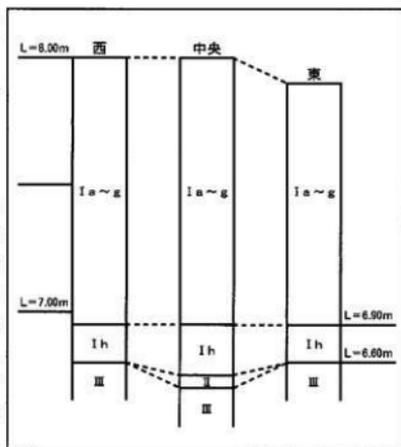
調査は重機で道路部分のアスファルトを剥ぎ取った後、調査区の表土や耕作土（Ⅰ層）を除去した。遺物包含層（Ⅱ層）は人力掘削し、出土遺物は測量機器（トータルステーション）を用いて三次元計測し、取り上げた。掘削後、ジョレン等を用いて遺構を検出した。その後、ラジコンヘリを用いて空中写真撮影（全景）を実施し、遺構概略図を作成した。撮影後、移植ごて等を用いて遺構掘削を行ない、断面図（1/20）、重要遺構平面図（1/10・1/20）、遺物出土状況図（1/10）等の図面作成を行った。遺構完掘後、再度ラジコンヘリにより空中写真（全景・図化用）の撮影を実施した。撮影後、足場を組み立て、調査区の全景・部分写真の撮影を行ったのち、井戸の断ち割りと同面作成、調査区西端部の確認調査等を行った。調査における写真撮影は35mm（白黒ネガ）、デジタルカメラ（カラー/RAW、j-png方式）、ブローニー（カラーリバーサル、白黒ネガ）を用いて行った。

#### (2) 基本層序

発掘調査区は東西約100mに及ぶが、調査区北側は農道整備が行われているため標高差はみられず、標高約8.0mでほぼ一定である。また、周辺地域の現況は主に水田である。

基本層序は上からⅠa～g層（砕石層・砂層等、農道整備の盛土）、Ⅰh層（灰黄褐色～褐灰色土；旧耕作土）、Ⅱ層（黒～黒褐色粘上質シルト：遺物包含層）、Ⅲa～d層（にぶい黄褐色土～オリーブ灰色粘上質シルト：地山・帯水層）に大別した。Ⅱ層の遺物包含層は農道・農地整備のためほとんど削平されて存在しておらず、調査区中央部および西端部のやや窪んだ地形でのみ5～15cmの堆積を確認した。

遺構検出面はⅢa層上面であり、標高は約6.6mで調査区内ではほぼ平坦である。Ⅲc～Ⅲd層が植物遺体を多量に含む帯水層であり、調査区の中央北端に位置する井戸SE04はこの層まで掘り込んでいる。



第3図 基本層序

### 2. 遺構

検出した遺構は、溝10条、井戸1基、土坑2基、ピット3基である。主な遺構は調査区中央で検出した中世の井戸1基と平行に延びる溝2条、調査区西端で検出した古代の溝1条などである。

### (1) 溝 (第5・6図、写真図版2・3)

SD01は調査区やや東側を南東-北西方向に延びる溝で、検出長4.11m、幅0.56~0.70m、深さ0.10~0.21mを測る。遺構直上で敲打痕が両側にある叩石が出土した。覆土は単層で黒褐色粘土質シルトを基調とする。

SD02・SD03は、調査区のほぼ中央、南北に平行して延びる溝である。いずれも内側に浅い溝、外側に深い溝を連結した構成で、関連した遺構である可能性が高い。SD02は検出長2.92m、幅1.35m、深さは浅い溝部分で0.11m、深い溝部分で0.30m、SD03は検出長2.90m、幅1.34m、浅い溝で0.09m、深い溝部分で0.28mを測る。道路の側溝である可能性が高く、心々距離は約2mである。覆土はいずれも黒褐色シルトを基調としている。

SD06は調査区西側を南北に延びる溝で、検出長3.25m、幅0.78m、深さ0.29mを測る。遺物は古代の土師器片が1点出土した。覆土は黒褐色シルトを基調としているが、地山であるにぶい黄褐色粘土質シルトが斑状に約30%混じっている。

SD07は調査区西側を北東-南西方向に延びる溝で、検出長3.85m、幅1.52m、深さ0.25mを測る。覆土は単層で、黄灰色粘土質シルトを基調とする。遺物は古代の土師器の小型甕(9世紀)が出土している。

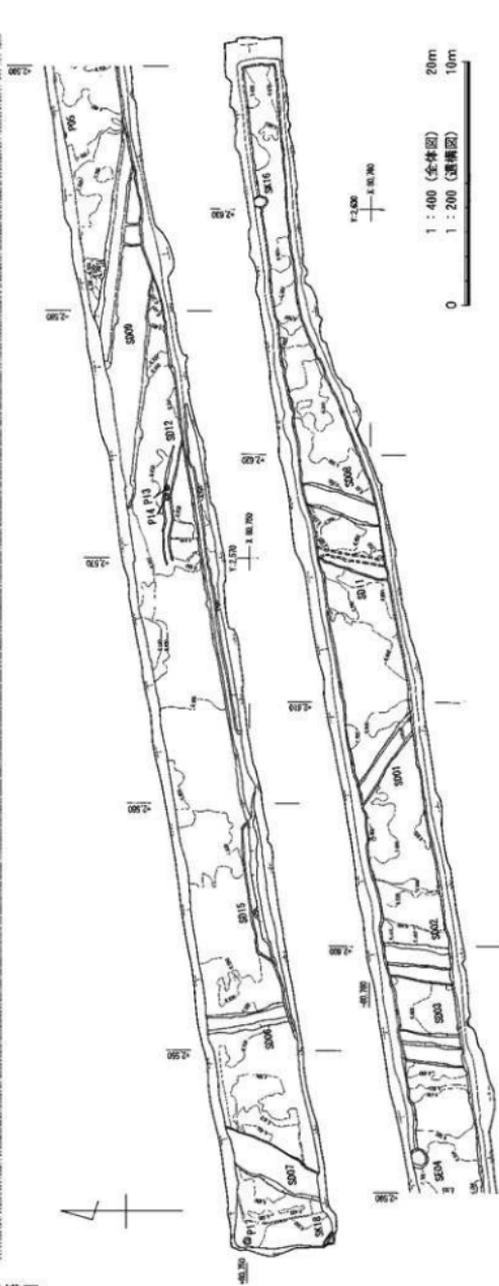
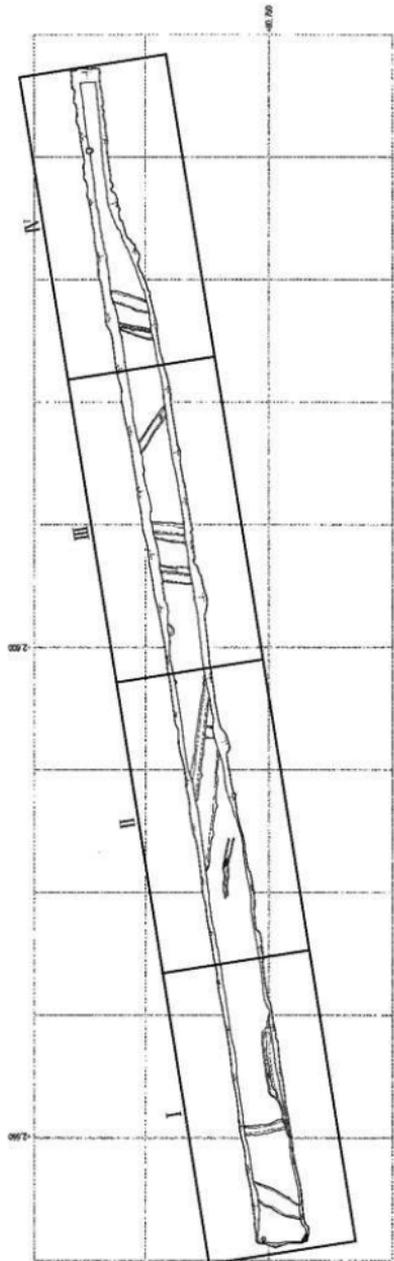
SD08・SD11は調査区中央からやや東側、南北に平行して延びる溝で、SD08は検出長3.37m、幅1.07m、深さ0.22m、SD11は検出長3.20m、深さは残存部で0.10mを測る。SD11の東側が暗渠に切られているため、幅および遺構間の幅は不明である。覆土はいずれも単層で、黒褐色粘土質シルトを基調とする。

SD09は調査区のほぼ中央を西北西-東南東方向に延びる大型の溝で、検出長8.23m、幅2.72m、深さは最深部で0.45mを測る。浅い幅広の部分と、幅0.85mと狭く深い部分の2段に分かれる構造で、北側が深くなっている。覆土は深い部分がレンズ状の自然堆積で、暗灰色~黒色粘土を基調としている。しまりがゆるく、中世の遺構の覆土と異なるため、時期差があるものとする。遺物は出土していない。

### (2) 井戸 (第7図、写真図版3)

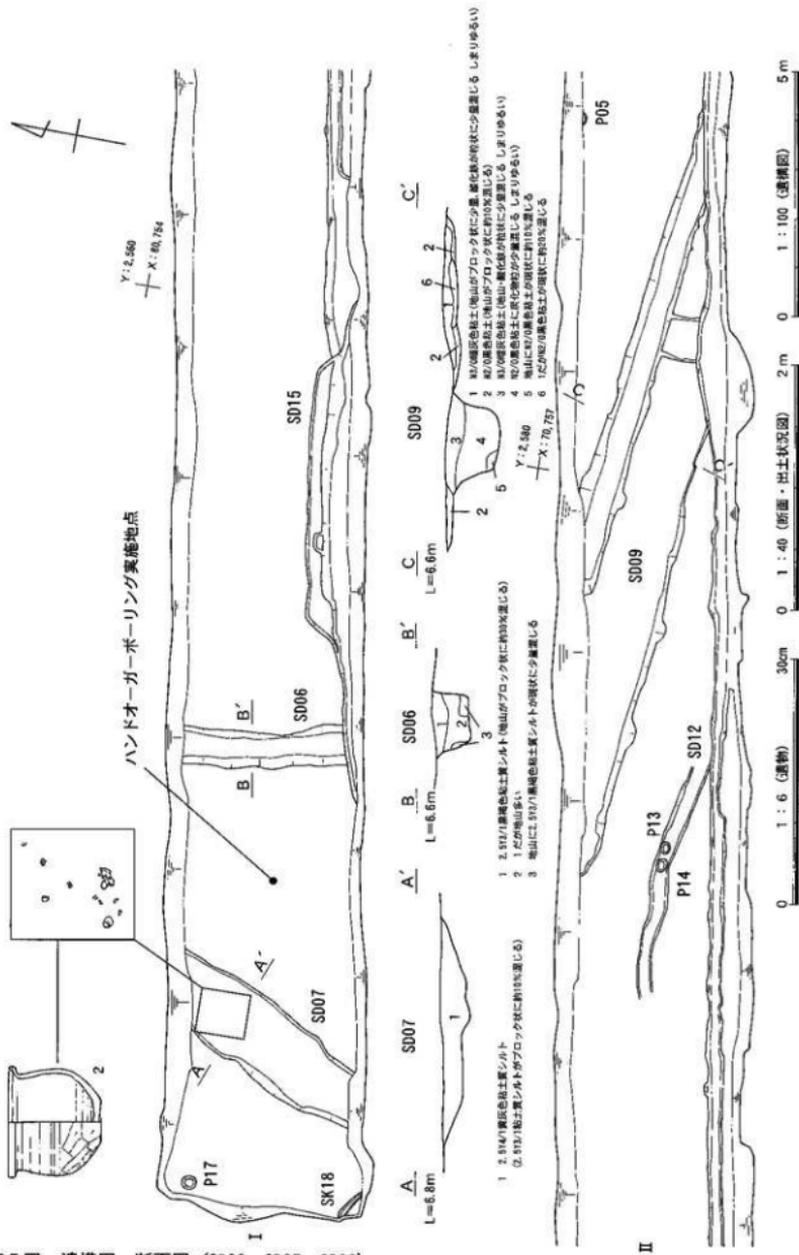
SE04は調査区のほぼ中央北端に位置する平面形態が円形の素掘り井戸であり、北側調査区外に続く。径約0.75m、深さ1mを測り、帯水層であるⅢd層まで達している。壁の立ち上がりは急である。調査時も常に水が湧出する状態で、数時間でほぼ満杯となった。下層部分が黒褐色粘土、上層部分が黄灰色粘土を基調とする覆土がレンズ状に堆積する。

遺物は中世土師器の小片1点、珠洲播鉢2点(吉岡編年Ⅱ期・Ⅲ期)、加工木、軽石、竹炭、モモの核などが出土した。特に珠洲播鉢1点は破損後に被熱し多量に煤が付着した状態で出土しており、その上に円礫を載せた状態で井戸底付近、湧水点以下のレベルに正置されていた。開削に伴って底部に意図的に設置した可能性、井戸廃棄時に伴う儀礼として埋納された可能性が指摘できる。その目的として集水・浄水などの機能的役割と祭祀・儀礼的な役割が考えうるが、珠洲を井戸底に正置する事例は確認できなかった。ただ二次被熱していたことは、祭祀面から魔神との関連性がうかがえる。それ以外の遺物としては、北西側の掘方に貼り付けられたような形で珠洲播鉢が出土し、その下から自然礫が2点出土した。井戸の側面補強の目的で礫の上に珠洲を据え付けたと考える。

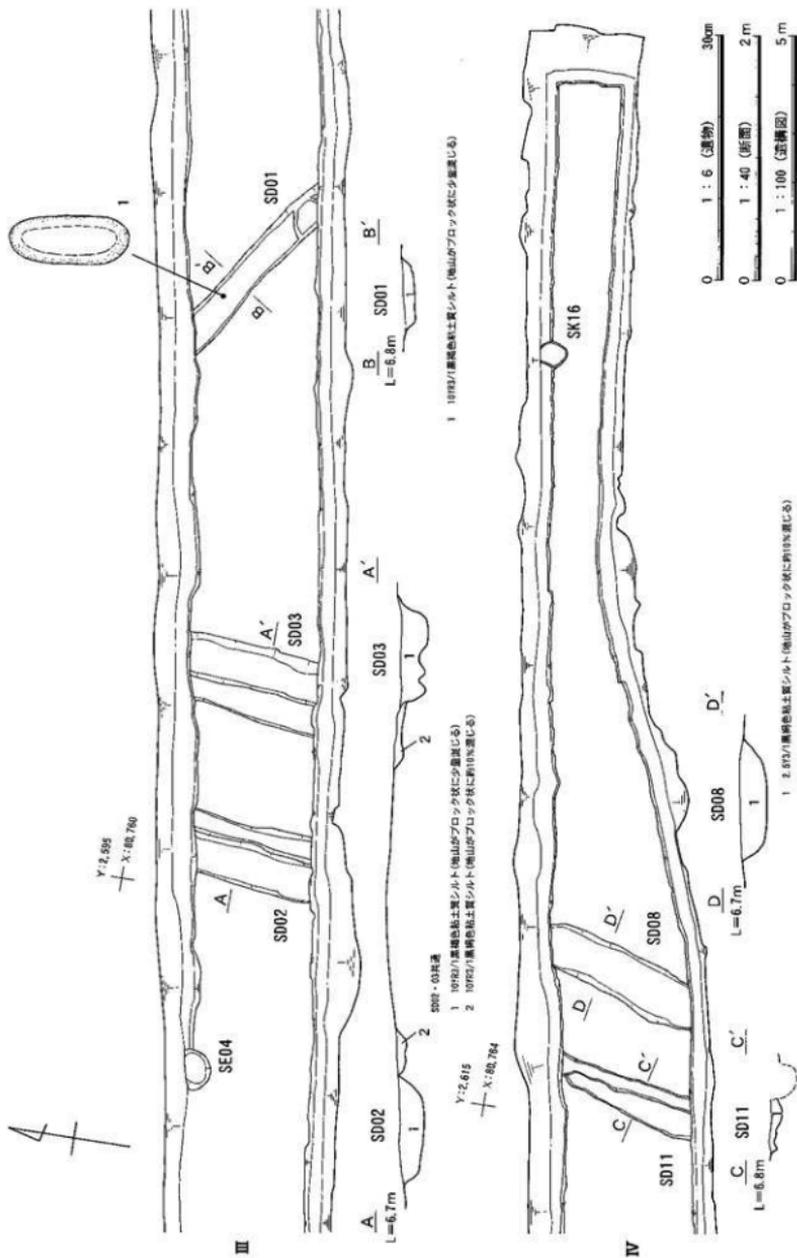


第4図 八ヶ山A遺跡 発掘調査全体図・遺構図

第5図 遺構図・断面図 (SD06・SD07・SD09)



第6図 遺構図・断面図 (SD01~03・SD08・SD11)

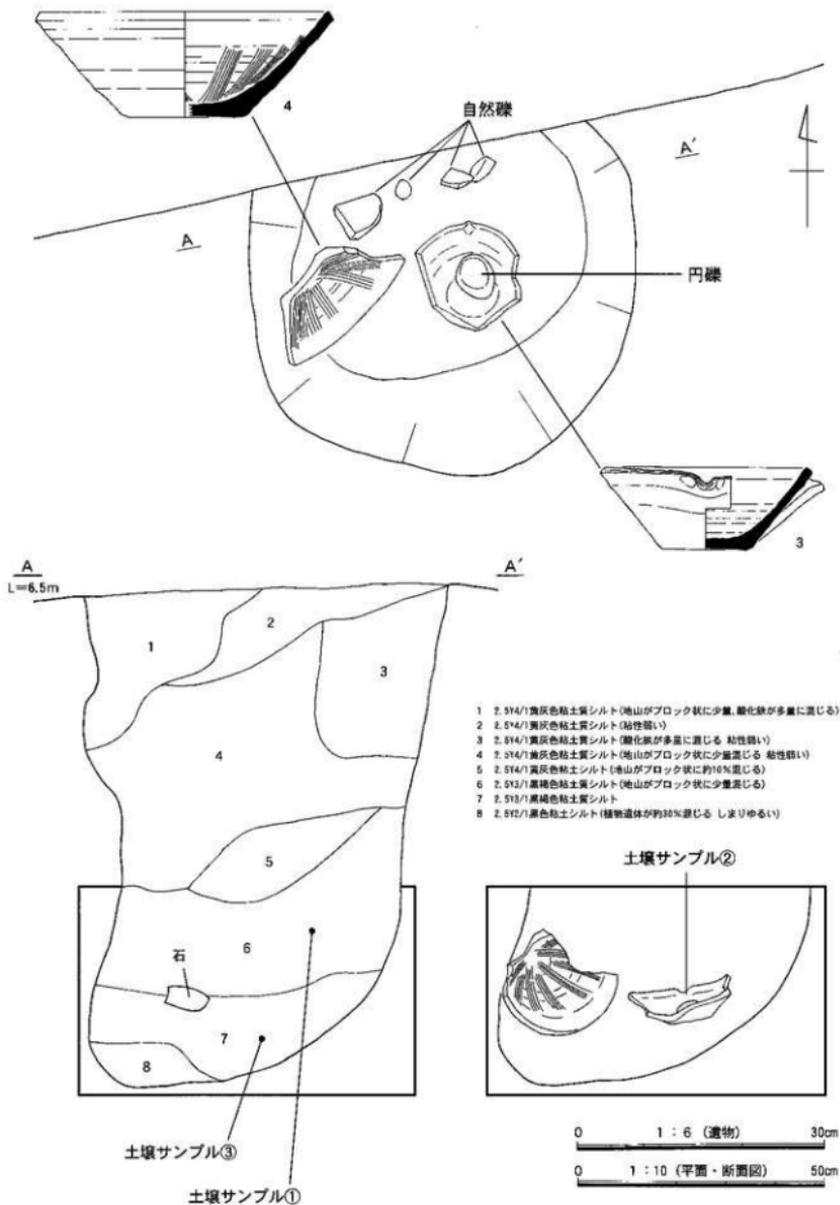


1 10P3/1原簿色粘土質シルト(砲山がブロック状に約10%混じる)

1 10P3/1原簿色粘土質シルト(砲山がブロック状に少量混じる)

1 10P3/1原簿色粘土質シルト(砲山がブロック状に少量混じる)  
2 10P3/1原簿色粘土質シルト(砲山がブロック状に約10%混じる)

1 2.8P3/1原簿色粘土質シルト(砲山がブロック状に約10%混じる)



第7図 SE04平面・断面図

### 3. 遺物（第8図 写真図版4）

遺物は縄文土器、古代土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、越中瀬戸、唐津、近世陶磁器、板状木製品、加工木、捺石、軽石、モモの核などが出土した。ほとんどの遺物が表土からの出土である。出土した遺物で遺構の時期が判断できるものとしては、SD07で出土した古代土師器の小型甕1点（9世紀）、SE04で出土した珠洲2点（13世紀後半～14世紀）などがある。

#### （1）遺構出土遺物

SD01 1は叩石である。長楕円縁の両端に敲打痕をもつ。

SD07 2は土師器の小型甕である。ロクロ成形で、体部下半から外底面にかけてはヘラケズリ調整を施す。口縁部は内側に折り返して整形される。9世紀のものと考えられる。

SE04 3・4は、いずれも珠洲である。3は小型の片口鉢である。口径23.7cm、器高9.85cmを測る。二次被熱が認められ、内底面を除く全体に煤が付着する。割れ口にも煤が付着しており破損後に被熱している。4は播鉢で、口径34.2cm、器高12.65cmを測る大型の鉢である。内面に1単位約2.2cm 9目の節目を8条施す。内底面付近に使用による摩耗がみられるが、全体に残りが良い。いずれも吉岡編年Ⅱ期～Ⅲ期に相当し、13世紀後半から14世紀頃のものと考えられる。

#### （2）包含層出土遺物

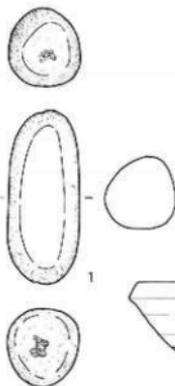
5・6は古代土師器の小型甕である。5は口径21.3cmを測る。9世紀のものである。6は底部片で、外面にヘラケズリ調整を施す。7・8は須恵器の坏である。7は高台環で、褐色を呈する。内底面には使用による摩耗が明瞭にみられる。8の体部は直立に近く深身である。7・8はいずれも8世紀のものと考えられる。9は須恵器の体部で内面に扇状の当て具痕がみられる。10・11は珠洲の播鉢で口径33～34cmを測る。10の内面には二次被熱による器表面の剥離がみとめられ、炭化物が厚く付着していることから、調理に用いたと考える。内面の摩耗と煤の付着が激しいが、節目が数条残存する。口縁部は内傾している。11の口縁端部は外傾する。内面の節目はみられない。いずれも吉岡編年Ⅳ期に相当し、14世紀中頃から後半頃のものと考えられる。

12～16は全て非ロクロ成形の中世土師器である。12・13は口縁部内外面に油煙痕が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。12は体部中程を薄く仕上げ、口縁部でふくらみ端部は薄く仕上げ上げる。13は底部から体部が緩やかに立ち上がり、口縁部に向かってそのまま延ばし、端部を薄く仕上げ上げる。14は底部から体部が緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部に向かってそのまま延ばし、端部を丸く仕上げ上げる。15は底部から体部が緩やかに立ち上がり、体部中程で軽く内湾して口縁部に向かって延ばし、端部はそのまま薄く仕上げ上げる。16は底部から立ち上がった体部が中程で軽く内湾して口縁部に向かって延ばし、端部は軽く外反して薄く仕上げ上げる。いずれも体部下半に指おさえ、上半には1段ナデがみられる。12～15は越前編年のND類、16がNC類で、13～14世紀のものと考えられる。

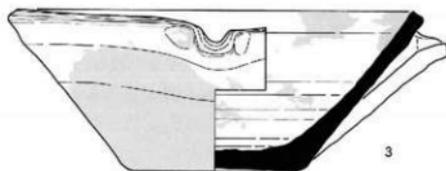
17・18は中国製磁器である。17は龍泉窯系青磁の碗である。口縁部は直口で体部外面に鑄蓮弁文を有する。青磁釉は緑灰色を呈する。太宰府編年碗Ⅱb類で13世紀初頭～前半のものである。18は白磁の皿である。高台をもたない。太宰府編年皿Ⅸ-1c類で13世紀後半～14世紀前半のものである。19・20は越中瀬戸の内売げの小皿である。19は灰釉、20には鉄釉を施す。19は釉留めの段をもつ。宮山編年のⅠ期に相当し、16世紀末～17世紀初めのものである。20は印花文をもたない。内面に重ね焼き痕が残る。いずれも削り出し高台である。

21は唐津の皿である。体部上部内外面に灰釉を施す。体部外面下部は回転ヘラ削りで、一部に回転ナデがみられる。削り出し高台である。胎土目積期（1580～1610年）のものと考えられる。

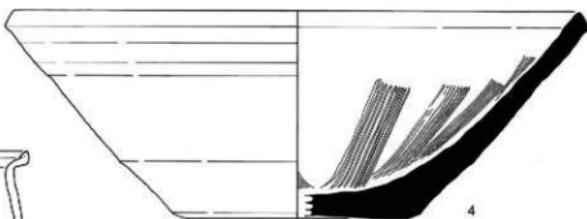
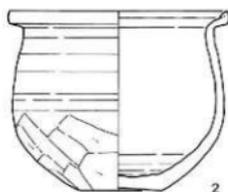
SD01



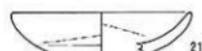
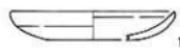
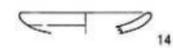
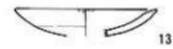
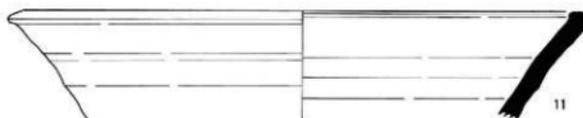
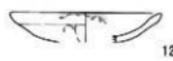
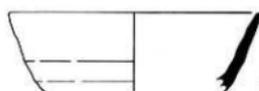
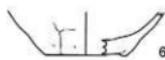
SE04



SD07



包含層



■ コゲ・スス

0 1 : 4 (1) 20cm

0 1 : 3 (2~21) 15cm

第8図 遺物実測図

第1表 遺構一覧  
遺一覽

番号	方向	検出長(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物	備考	時期
SD01	N-55°-W	4.11	0.56~0.70	0.10~0.21	印石		中世
SD02	N-4°-E	2.92	1.35~1.52	0.19~0.30		SD03との心々距離約2m 道路創溝	中世
SD03	N-5°-E	2.90	0.77~1.34	0.25~0.28		道路創溝	中世
SD06	N-10°-W	3.25	0.63~0.78	0.21~0.29	土師器(古代)		中世
SD07	N-24°-E	3.85	1.40~1.52	0.08~0.14	土師器(古代)		古代
SD08	N-15°-E	3.37	0.92~1.07	0.16~0.22			中世
SD09	N-97°-E	8.23	1.97~2.25	0.22~0.35			近代?
SD11	N-15°-E	3.20	(0.55~0.85)	0.06~0.10			中世
SD12	N-94°-E	4.95	0.24~0.36	0.07~0.10			中世
SD15	N-81°-E	9.73	0.78	0.53		貯水池か	近代?

その他の遺構一覧

番号	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物	備考	時期
SE04	円形	0.63	(0.64)	0.71	珠洲・中世土師器・ 加工木・凝石		中世
SK16	不整形	0.53	(0.53)	0.19			
SK18	不整形	0.70	0.12	0.28			
P05	(楕円形)	0.21	(0.10)	0.03			
P13	不整形	0.24	0.18	0.06			
P14	楕円形	0.27	0.20	0.08			
P17	円形	0.29	0.27	0.12			

第2表 遺物観察表(石製品)

№	遺構	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	秤量(g)	色調	石材	備考
1	SD01	印石	10.2	5.8	6.3	722.3	灰白	凝灰岩	両面に捺打痕あり

第3表 遺物観察表(土器)

№	遺構	種別	器種	法 量 (cm)			胎土	色 調 (胎土)	備 考
				口径	底径	器高			
2	SD07	土師器	小型甕	13	5	10.9	密	浅黄橙	9世紀か
3	SE04	珠洲	片口鉢	23.7	9.6	9.85	密	灰	全体にスス付着 吉岡編年II期
4	SE04	珠洲	播鉢	34.2	13.2	12.7	密	褐灰	吉岡編年III期
5	-	土師器	小型甕		5		粗 粗砂粒含	灰黄橙	
6	-	土師器	小型甕	21.3			密 砂粒含	にぶい黄橙	
7	-	須恵器	高台杯	13.6	7.4*	4.1	密	褐灰	
8	-	須恵器	杯	15			密	灰白	
9	-	須恵器	壺				密	灰	内面に層状当て具痕
10	-	珠洲	播鉢	33.6			密~2mmの石英砂含	にぶい黄橙	内面全体にコク付着 吉岡編年IV期
11	-	珠洲	播鉢	33.4			やや粗 砂多	灰白	吉岡編年IV期
12	-	中世土師器	皿	9			密	灰白	非ロクロ成形 口縁部に油煙痕付着
13	-	中世土師器	皿	8.5			密	灰白	非ロクロ成形 口縁部に油煙痕付着
14	-	中世土師器	皿	8			密	灰白	非ロクロ成形
15	-	中世土師器	皿	9.9	5.4	1.75	密	にぶい黄橙	非ロクロ成形
16	-	中世土師器	皿	13			密	灰白	非ロクロ成形
17	-	青磁	皿	16.9			稍密	明青灰	青磁輪 隆徳井文 龍泉窯系 13世紀
18	-	白磁	碗		6		稍密	灰	白磁輪 太宰府編年Ⅸ・1c類
19	-	越中瀬戸	皿	10	4.5*	3.05	密	にぶい橙	灰輪 削り出し高台
20	-	越中瀬戸	皿		3.85*		密	にぶい橙	鉄輪 印花文なし 内面に重ね焼き痕
21	-	唐津	皿	10.7			密	にぶい赤橙	灰輪 胎土自礫期(1580~1610)

\*: 高台径

## 第IV章 理化学分析

### 1. 目的

- (1) ハンドオーガーボーリングによって採取した土壌サンプル (S-1~S-3) を用い、遺跡の当該時期である中世以前の古環境の復元を行う。
- (2) 中世の井戸SE04の下層覆土から採取した土壌サンプル①~③(それぞれ理化学分析土壌サンプル⑤~⑦に対応) を用い、遺跡の当該時期である中世の古環境の復元および植物利用の検討を行う。

### 2. 試料

ハンドオーガーボーリングの土壌サンプル採取地点は遺構図 I (6 P) に図示した。またボーリングは遺構検出面から実施したため、第4表で記した深度は遺構検出面からのものであり、孔内水位の9/24は調査実施日である。なお、下記のハンドオーガーボーリングの結果は中部地質株式会社の実験結果から転載し、バリノ・サーヴェイによる理化学分析は基本的にそのまま掲載した。

ハンドオーガーボーリング					井 戸						
試料番号	層厚 (m)	深度 (m)	土質区分	色調	記 事	孔内水位 (m)	層 序	層 厚 (m)	深 度 (m)	土 質 区 分	色 調
S-1	1.30	1.30	粘土質シルト	淡青灰色	含水量中程度で、粘性強い。下部に行くにつれてやや砂分が多くなる傾向がある。草根等が点在。	9/24 0.62 ▽	IIIa	0.40	0.40	粘土質シルト	黄褐色
							IIIb	0.30	0.70	粘土質シルト	オリーブ灰色
							IIIc	0.20	0.90	粘土	灰色
							IIId	1.02 (井戸底)		粘土質シルト	灰色
S-2	1.50	2.80	砂質シルト	淡青灰色	完 新 世						
				砂は細砂主体。含水量多くやや粘性が強い。層相均一で未分解の植物片、木片を含む。下部に行くにつれて砂分の含有量は多くなり、粒径も大となる。							
S-3	1.20	4.00	砂質シルト	灰色							
					層相は高含水量の砂質シルト~シルト質砂。上位層に比して砂分多く不均質。砂は細砂~中砂主体で、所々に砂分主体の薄層が介在。ゆるく軟質で、孔壁破壊が顕著。						

第4表 理化学分析土壌サンプル採取一覧

### 3. ハヶ山A遺跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

#### (1) はじめに

本報告では、ハヶ山A遺跡の中世および中世以前の古環境や、中世の植物利用の検討を目的として自然科学分析調査を実施する。なお、本報告では、紙幅の関係から各分析方法および分析結果の一部を割愛している。

#### (2) 試料

試料は、調査区西側の遺構確認面下位の堆積層（0～4.0m）よりハンドオーガボーリングによって採取された土壌3点（S-1～S-3）と、中世の井戸跡（SE04）下層覆土より採取された土壌3点（土壌サンプル①：6層，土壌サンプル②：洲3-円礫間堆積土，土壌サンプル③：7層）および同井戸跡下層の発掘調査時に検出された昆虫遺体3点である。

ボーリング試料は、調査記録によれば、S-1が淡青灰色の粘土質シルト、S-2が淡青灰色の砂質シルト、S-3が灰色の砂質シルトとされており、下位のS-3から上方のS-1に向かって堆積物が細粒化する傾向が確認されている。また、SE04試料は、いずれも黒灰～黒褐色のシルト～粘土からなり、灰色シルト～粘土の偽鏽や炭化物の混入の程度が異なる。

これらの試料のうち、ボーリング試料3点を対象に珪藻、花粉、植物珪酸体分析、井戸跡（SE04）試料を対象に微細物分析、さらに、微細物分析で検出された昆虫遺体と井戸跡下層調査時に検出された昆虫遺体を対象に昆虫同定を行う。

#### (3) 結果

##### A 珪藻分析

結果を図1に示す。珪藻化石の産出頻度は、S-2とS-3が比較的多いが、S-1は17個体と少ない。完形殻の出現率は、S-3が約70%、S-2が約60%、S-1が約30%である。産出分類群数は、合計で44属66分類群である。以下に、各試料の産状を示す。

S-3は、塩分濃度に対する適応性で類別すると、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻）が全体の約75%、陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に生育する陸生珪藻が約25%産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応性）は、塩漬不定性種、好+真アルカリ性種、好+真流水性種と流水不定性種がそれぞれ多産する。好流水性で中～下流性河川指標種の *Reimeria sinuata*、好流水性の *Achnanthidium convergens* が各10%検出され、同じく中～下流性河川指標種の *Fragilaria vaucheriae*、*Planothidium lanceolatum*、*Geissleria decussis*、*Cymbella turgidula*、好流水性の *Achnanthidium subhudsonis* 等を伴う。流水不定性種では、*Achnanthidium minutissimum*、*Placoneis elginensis*、*Gomphonema pumilum* var. *rigidum* 等も低率ながら産出する。また、陸生珪藻では耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Amphora montana*、*Diademesis biceps*、*Luticola mutica* 等が産出する。

S-2は、水生珪藻の割合や淡水性種の生態性の特徴がS-3に類似する。種類構成は、S-3と多少異なり、流水性で上流性河川指標種の *Gomphonema rhombica* と、中～下流性河川指標種の *Reimeria sinuata* が約10%産出し、上流性河川指標種の *Achnanthes japonica*、好流水性の *Achnanthidium subhudsonis*、*Achnanthes crenulata*、*Achnanthidium convergens*、*Cocconeis lineata* 等を伴う。

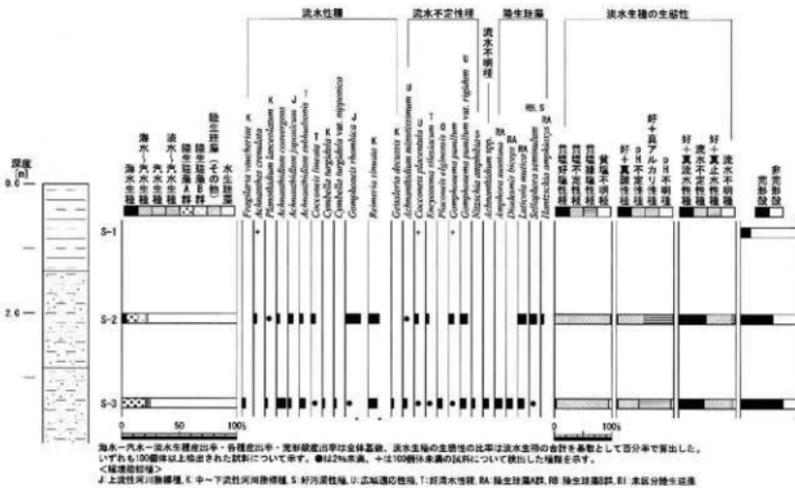


図1. 主要産化石群集

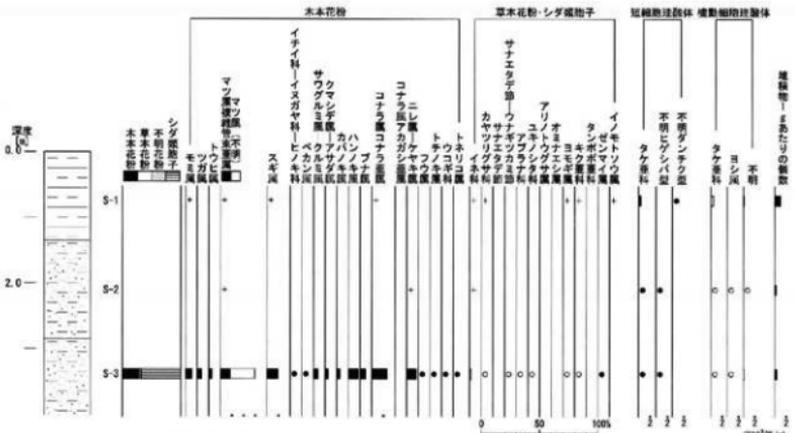


図2. 花粉化石群集および植物細胞片含量

流水不定性種では、Gomphonema pumilum、Gomphonema pumilum var. rigidum、Cocconeis placentula 等が産出する。また、陸生珪藻では、A群のLuticola mutica、水域にも生育するB群のSellaphora seminulum が産出する。

S-1 は、珪藻化石の産出が少なく、Achnanthes crenulata などの流水性種、Cocconeis placentula、Gomphonema pumilum などの流水不定性種が少量認められた程度である。

## B 花粉分析

結果を図2に示す。いずれの試料も分析残渣が少なく、プレパラートが2~3枚作成できる程度である。検出される花粉化石・胞子数は少なく、多い試料でも約400個程度である。定量分析を行っていないため詳細は不明であるが、堆積物1cc当たりの花粉粒数は多い試料でも100個程度と推測され、花粉化石が多産する一般的な試料と比べると1/100以下と考えられる。S-3は、木本花粉がca. 100個を越えたことから図示した。花粉群集は、シダ類胞子が全体の70%近くを占める。次いで多く確認された木本類では、マツ属が多く、モミ属、ハンノキ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属を伴う。草本花粉は全体的に少なく、イネ科などが確認される程度である。S-2は、花粉化石およびシダ類胞子の産出は僅かであり、マツ属やイネ科等が少量産出するのみである。S-1は、シダ類胞子が全体の90%以上を占め、花粉化石は少ない。検出された花粉のうち、木本花粉ではマツ属やスギ属、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科が産出する。

## C 植物珪酸体分析

結果を図2に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されたが、保存状態は不良で、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。各試料の含量は、約300~1,000個/gと低い傾向にある。検出された分類群は、タケ亜科やヨシ属などが認められる程度で、栽培種に由来する植物珪酸体は検出されない。

## D 微生物分析

結果を表1に示す。井戸(SE04)の⑤~⑦層からは、被子植物39分類群(広葉樹のクワ属、モモ、サンショウ属、ニワトコ、草本のサジオモダカ属、オモダカ科、イボクサ、イネ、コムギ、ムギ類、ヒエ近似種、アワ近似種、エノコログサ属、イネ科、ウキヤガラ近似種、ホタルイ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科、アサ、カラムシ属、イヌタデ近似種、タデ属、ナデシコ科、ヒユ科、アブラナ科、クサネム近似種、カタバミ属、エノキグサ、メロン類(マクワ・シロウリ型)、ミズユキノシタ近似種、アリノトウグサ、チドメグサ属、サクラソウ科、シソ属、キランソウ属、ナス近似種、ナス科、タカサブrow、キク科)487個、不明1個の種実と、木材、炭化材、昆虫が検出された。

検出された種実遺体群は、3試料とも草本主体の種類構成を示す。栽培種は、モモの核6個(⑤層)、イネの穎20個(⑤・⑥層)、炭化類61個・炭化胚乳6個(⑤~⑦層)、コムギの炭化胚乳4個(⑦層)、ムギ類の炭化胚乳1個(⑦層)、ヒエ(近似種)の炭化胚乳1個(⑤層)、アワ(近似種)の炭化胚乳1個(⑤層)、アサ(?含む)の果実6個(⑤・⑥層)、メロン類(マクワ・シロウリ型)の種子1個(⑤層)、シソ属の果実1個(⑥層)、ナス(近似種)の種子1個(⑤層)が確認された。

栽培種を除いた種実遺体群は、木本は、落葉高木のクワ属の核1個(⑤層)・炭化核9個(⑦層)と落葉低木のサンショウ属の種子1個(⑦層)、ニワトコの核1個(⑥層)が確認された。草本は、明るく開けた場所に生育する、いわゆる人里植物に属する分類群から多く、とくに、⑥層でエノコログサ属(156個)、イネ科(96個)が多産する。水湿地生植物は、サジオモダカ属(⑦層)、オモダカ科(⑤層)、イボクサ(⑦層)、ウキヤガラ(近似種)(⑦層)、ホタルイ属(⑤・⑥層)、クサネム近似種(⑥層)、ミズユキノシタ(近似種)(⑤層)、タカサブrow(⑥層)が確認された。

## (4) 昆虫同定

結果を表2に示す。同定した10試料はいずれもコウチュウ目(Coleoptera)である。検出された種類は、オサムシ科(Carabidae)のツヤヒラタゴミムシ属(Synuchus)、ヒョウタンゴミムシ属(Scarites)、ゴミムシ類、ハネカクシ科(Staphylinidae)のアリガタハネカクシ属(Megalopaederus)、コガネムシ科(Scarabaeidae)のマグソコガネ属(Aphodius)とスジコガネ属(Mimela)、ゾウムシ科(Curculionidae)のコフキノゾウムシ属(Eugnathus)である。

表1. 微生物分析結果

分類群	部位	状態	SE04			備考
			(上)	下部(中)	最下部(下)	
			⑤層	⑥層	⑦層	
木本						
クワ属	核	完形 炭化 破片 炭化	1 - - -	- - - -	- - 8 1 6 1	栽培種
モモ	核	破片	-	-	6	
サンショウ属	種子	破片	-	-	1	
ニフトコ	核	破片	-	1	-	
草本						
サシオモダカ属	果実	完形	-	-	1	栽培種
オモダカ科	種子	完形	2	-	-	
イボクサ	種子	完形	-	-	1	
イネ	穎	破片(基部)	7	4	-	
		破片	2	7	-	
		破片(基部)	12	6	16	
		破片	12	9	6	
	胚乳	完形	1	1	1	
		破片	-	1	2	
コムギ	胚乳	完形	-	-	4	
ム半類	胚乳	完形	-	-	1	
ヒエ近似種	果実	完形	1	-	-	
アワ近似種	胚乳	完形	1	-	-	
エノコログサ属	果実	完形	1	100	-	
		破片	-	56	5	
イネ科	果実	完形	1	-	-	
		完形	4	86	-	
		破片	5	10	-	
ウキヤガラ近似種	果実	完形	-	-	1	
ホタルイ属	果実	完形	1	1	-	
カヤツリグサ属	果実	完形	9	15	4	
カヤツリグサ科	果実	完形	-	-	1	
アサ?	果実	破片	1	-	-	
アサ?	果実	破片	1	4	-	
カラムシ属	果実	完形	-	-	1	
イヌタデ近似種	果実	完形	-	1	-	
タデ属	果実	完形	-	1	-	
		破片	-	1	-	
ナデシコ科	種子	完形	6	4	-	
ヒユ科	種子	完形	1	-	1	
アブラナ科	種子	完形	-	1	-	
クサネム近似種	果実	破片	-	4	-	
カタバミ属	種子	完形	2	3	1	
		破片	1	-	-	
エノキグサ	種子	完形	-	1	-	
		破片	5	1	4	
メロン類(マクワ・シロウリ型)	種子	完形	1	-	-	
ミスユキノシタ近似種	種子	完形	1	-	-	
アリノトウグサ	核	完形	1	1	-	
チドメグサ属	果実	完形	1	-	-	
サクラソウ科	種子	完形	-	2	1	
シソ属	果実	完形	-	1	-	
キランソウ属	果実	完形	-	-	1	
ナス近似種	種子	完形	1	-	-	
ナス科	種子	破片	-	-	3	
タカサブロウ	果実	完形	-	4	-	
		破片	-	7	-	
キク科	果実	破片	-	-	1	
不明樹実		完形	-	1	-	
木材			25	4	-	
炭化材			1.4	1.8	-	[cm]最大径
			0.07	0.08	0.07	[g]乾燥重量
			12.2	7.7	12.2	[mm]最大径
昆虫			108	58	48	
分析量			300	300	300	[cc]
			483.24	531.32	472.85	[g]

表2. 昆虫同定結果

遺 体	層位/試料名	目	科	種 類	部 位	備 考
SE04	(上)	コウチュウ	オサムシ	ヒョウタンゴミムシ属	右大腿	微細物分析にて抽出
		コウチュウ	ソウムシ	ニフキソウムシ属	右上脛	微細物分析にて抽出
	下層(中)	コウチュウ	オサムシ	ゴミムシ類	前脚腹板	微細物分析にて抽出
		コウチュウ	ハネカクシ	アリガタハネカクシ属	前脚	微細物分析にて抽出
	最下層(下)	コウチュウ	不明	不明	小腸板	微細物分析にて抽出
		コウチュウ	オサムシ	ツヤヒラタゴミムシ属	左上脛の一部	微細物分析にて抽出
		コウチュウ	コガネムシ	マグソコガネ属	石上硬基節	微細物分析にて抽出
	下脛	コウチュウ	コガネムシ	スジコガネ属	腹節腹板の一部	取上試料
		コウチュウ	コガネムシ	スジコガネ属	腹節腹板の一部	取上試料
		コウチュウ	コガネムシ	スジコガネ属	腹節腹板の一部	取上試料

このうち、ヒョウタンゴミムシ属は、ナガヒョウタンゴミムシもしくはホソヒョウタンゴミムシであると思われるが、顎での区別は不能であった。本種は、荒地や畑地の地表部に生息し、他の小動物を餌とする。コフキソウムシ属は、レンゲ・カラスノエンドウなどのマメ科植物を食害することが知られている。ゴミムシ類やアリガタハネカクシ属、アリガタハネカクシ属も、荒地・畑地もしくは開墾地などの、人為的に攪乱された場所の地表部に生息する。マグソコガネ属は、林地・林縁地のシカなどの獣糞に集合することが知られている。スジコガネ属とした試料 No. 15-17 (SE04下層)は、おそらく同一個体であると思われる。スジコガネ属は、林地・開墾地の広葉樹の根を幼虫が食害する。

#### 4. 考察

##### (1) 古環境

ボーリング試料のうちS-3およびS-2は、中～下流性河川指標種群を多く含む流水性種が多産しており、下流域の氾濫堆積物の特徴が認められた。また、際だって検出される種類が認められず、陸生珪藻などの生育環境の異なる珪藻が混在するが、これは広い集水域から様々な環境に生育していた珪藻化石が流されて堆積したためと推定される。一方、花粉化石は、産出数が少なく保存状態も不良であった。花粉化石は、好気的環境下における分解に弱いことが知られている(中村, 1967など)が、S-3～S-2の堆積時は定常的に湿った環境ではなく、氾濫の間には離水した時期が存在したため、乾燥した時期に分解・消失した可能性がある。S-3の花粉化石群集では、シダ類孢子やマツ属の花粉化石の割合が高い特徴を示したが、これらは風化に耐性がある種類が相対的に高くなったものと推定される。なお、本遺跡北側の旧田通川河口付近に形成された微高地に立地する打出遺跡では、較正年代で縄文時代後期頃と考えられる堆積層を対象とした花粉分析の結果、ハンノキ属をはじめ、クルミ属-サワグルミ属、クマシデ属-アサダ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属などの広葉樹を中心とした低地林の存在が推定されている(田中ほか, 2007)。また、本遺跡南西の呉羽山丘陵に立地する百塚遺跡の遺構確認面より下位の堆積層(V層)より出土した炭化材などにアカガシ亜属が確認されている。S-3の堆積年代については不明であるが、これらの調査事例などを考慮すると、S-3における花粉群集は、周辺の低地および後背丘陵の森林植生などを反映していると考えられる。一方、植物珪酸体は、保存状態および検出状況が悪かった。堆積物中に取り込まれる量が少なかった事や、その後の経年変化などによって分解・消失した可能性がある。

S-1は、珪藻、花粉、植物珪酸体の微化石の産状はいずれも悪かった。検出されたこれらの微化石にはいずれも風化の痕跡が認められたことや、同堆積層の上位が遺構確認面とされていることなどを考慮すると、堆積後の経年変化および好気的環境などの影響によって分解・消失した可能性がある。

中世の井戸 (SE04) 埋積物 (⑤～⑦層) における栽培種を除く種実遺体群では、木本は落葉高木のクワ属、落葉低木のサンショウ属、ニワトコが確認された。これらは、伐採地や崩壊地、林縁などの明るく開けた場所に先駆的に侵入する分類群であることから、微高地や後背山地との林縁等を中心に分布していたと考えられる。草本は、人里植物に属する分類群が多く含まれることから、調査地周辺の明るく開けた草地環境に生育していたものに由来すると推定される。また、各試料からは、サジオモダカ属、オモダカ科、イボクサ、ウキヤガラ、ホタルイ属、クサネム近似種、ミズユキノシタ、タカサブロウなどの水湿地生植物も検出されることから、遺跡周辺の低地にはこれらの分類群が生育したと考えられる。このような、低地に生育する種類と丘陵地との林縁に生育していた種類が産出する傾向は、八町Ⅱ遺跡における花粉分析や種実分析の結果にも同様に現れる (富山市教育委員会, 2008)。また、同試料から検出された昆虫遺体群からは、草地的環境や明るい林地 (林縁部) の存在が示唆され、上記した種実遺体群から推定される古環境を支持する結果と言える。

## (2) 植物利用

中世の井戸 (SE04) 下層覆土 (土壌サンプル①～③) から検出された種実遺体群からは、モモ、イネ、コムギ、ムギ類、ヒエ (近似種)、アワ (近似種)、アサ?、メロン類 (マクワ・シロウリ型)、シソ属、ナス (近似種) などの栽培種が確認された。検出状況を見ると、検出量に多寡は認められないが、イネ、コムギを含むムギ類、ヒエ (近似種)、アワ (近似種) などの穀物類はいずれも炭化するという特徴が看取される。

本遺跡周辺では、西側に隣接する八町Ⅱ遺跡の古墳時代および中世の遺構覆土の分析調査結果では、モモ、イネ、アワーヒエーキビ、オオムギ、コムギ、アサ、ソバ、マメ類、エゴマなどの栽培種主体の種実遺体群が確認されている (富山市教育委員会, 2008)。これらの調査事例などを参考とすると、今回の栽培種の種類構成は、当該期に確認されている栽培種の傾向と調和しており、これらの栽培や利用が推定される。

## 引用文献

中村 純 1967『花粉分析』P232 古今書院

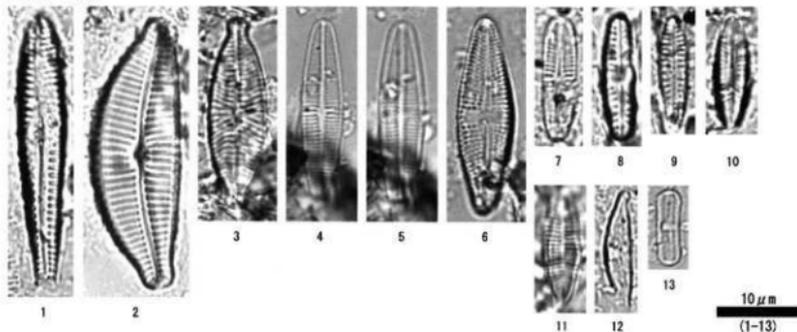
田中義文・伊藤良永・千葉博俊 2007『神通川下流域における古環境の変遷』

『富山市考古資料館紀要』26.2.5-36

富山市教育委員会 2006『富山市打出遺跡発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告7

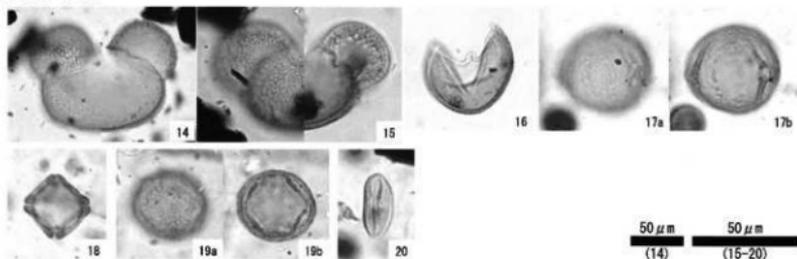
富山市教育委員会 2008『富山市八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書—泉宮農免農道 (呉羽和合2期地区) 整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』P223 富山市埋蔵文化財調査報告22 富山市教育委員会 富山市埋蔵文化財センター編

図版1 珪藻



1. *Gomphonopsis rhombica* (Fricke)Merino et al. (S-2)  
 2. *Cymbella turgidula* var. *nipponica* Skvortzow (S-3)  
 3. *Gelesteria decussis* (Oestrup)Lange-B. et Metzeltin (S-3)  
 4. *Achnanthisidium subhudsonis* (Hustedt)H.Kobayasi (横溝説: S-3)  
 5. *Achnanthisidium subhudsonis* (Hustedt)H.Kobayasi (無横溝説: S-3)  
 7. *Achnanthisidium japonicum* (H.Kobayasi)H.Kobayasi (S-3)  
 8. *Reimeria sinuata* (W.Greg.)Kociolek et Stoermer (S-2)  
 9. *Gomphonema pumilum* var. *rigidum* E.Reichardt et Lange-B. (S-3)  
 10. *Achnanthisidium convergens* (H.Kobayasi)H.Kobayasi (横溝説: S-3)  
 11. *Achnanthisidium convergens* (H.Kobayasi)H.Kobayasi (無横溝説: S-3)  
 12. *Achnanthisidium convergens* (H.Kobayasi)H.Kobayasi (横溝説: S-3)  
 13. *Diadesmis biceps* Arnott ex Grunow in Van Heurck (S-3)

図版2 花粉



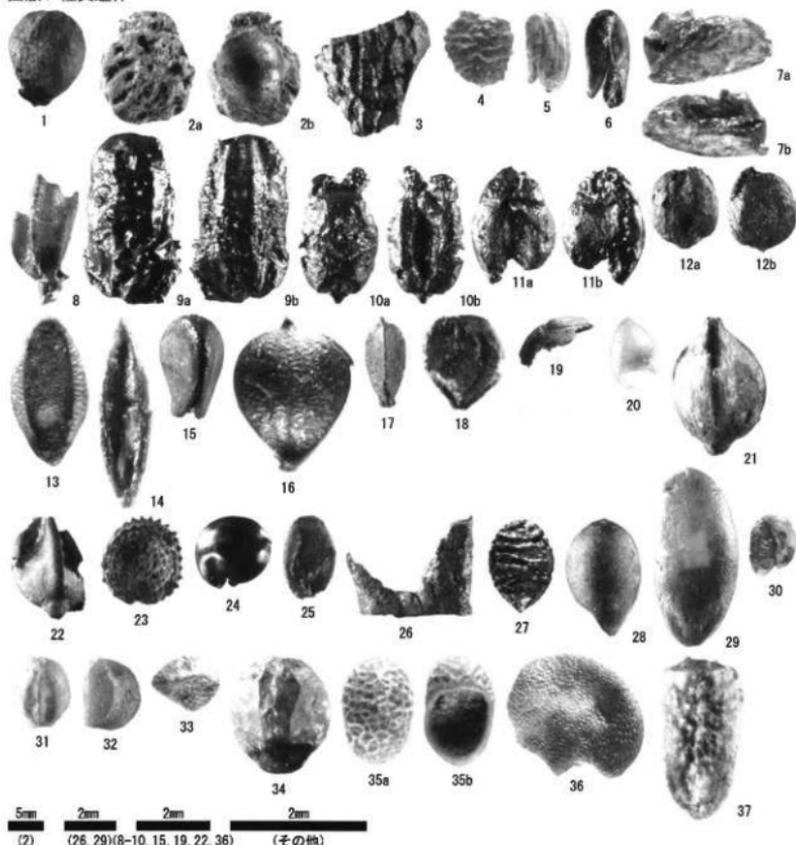
14. モミ属 (S-1)  
 15. マツ属 (S-1)  
 16. スギ属 (S-3)  
 17. ブナ属 (S-3)  
 18. ハンノキ属 (S-3)  
 19. コナラ属 (S-3)  
 20. トチノキ属 (S-3)

図版3 昆虫



21. ツヤヒラタゴミシ属 左上翅の一部(SE04最下層(下))  
 22. ヒョウタンゴミシ属 右大顎(SE04上)  
 23. ゴミシ類 前胸腹板(SE04下層(中))  
 24. アリガタハネカクシ属 前胸(SE04下層(中))  
 25. マグソコガネ属 右上翅基部(SE04最下層(下))  
 26. スジコガネ属 腹部腹板の一部(SE04下層)  
 27. スジコガネ属 腹部腹板の一部(SE04下層)  
 28. スジコガネ属 腹部腹板の一部(SE04下層)  
 29. コフキソウムシ属 右上翅(SE04上)  
 30. 不明(コウチュウ目) 小楯板(SE04最下層(下))

図版4 種実遗体



- |                                  |                             |
|----------------------------------|-----------------------------|
| 1. クワ属 核 (SE04最下層(下))            | 2. モモ 核 (SE04最下層(下))        |
| 3. サンショウ属 種子 (SE04最下層(下))        | 4. ニトコ 核 (SE04下層(中))        |
| 5. サジオモダカ属 果実 (SE04最下層(下))       | 6. オモダカ科 種子 (SE04(上))       |
| 7. イボクサ 種子 (SE04最下層(下))          | 8. イネ 籾 (SE04下層(中))         |
| 9. イネ 胚乳 (SE04最下層(下))            | 10. コムギ 胚乳 (SE04最下層(下))     |
| 11. ヒエ近似種 果実 (SE04(上))           | 12. アワ近似種 胚乳 (SE04(上))      |
| 13. エノコログサ属 果実 (SE04下層(中))       | 14. イネ科 果実 (SE04下層(中))      |
| 15. ウキヤガラ近似種 果実 (SE04最下層(下))     | 16. ホタルイ属 果実 (SE04(上))      |
| 17. カヤツリグサ属 果実 (SE04下層(中))       | 18. カヤツリグサ科 果実 (SE04最下層(下)) |
| 19. アサ 果実 (SE04(上))              | 20. カラムシ属 果実 (SE04最下層(下))   |
| 21. イヌタデ近似種 果実 (SE04下層(中))       | 22. タデ属 果実 (SE04下層(中))      |
| 23. ナデシコ科 種子 (SE04(上))           | 24. ヒユ科 種子 (SE04(上))        |
| 25. アブラナ科 種子 (SE04下層(中))         | 26. クサネム近似種 果実 (SE04下層(中))  |
| 27. カタバミ属 種子 (SE04下層(中))         | 28. エノキグサ 種子 (SE04下層(中))    |
| 29. メロン類(マクワ・シロウリ型) 種子 (SE04(上)) | 30. ミズユキノシタ近似種 種子 (SE04(上)) |
| 31. アリトウグサ 核 (SE04下層(中))         | 32. チドメグサ属 果実 (SE04(上))     |
| 33. サクラソウ科 種子 (SE04下層(中))        | 34. シソ属 果実 (SE04下層(中))      |
| 35. キランソウ属 果実 (SE04最下層(下))       | 36. ナス近似種 種子 (SE04(上))      |
| 37. タカサプロウ 果実 (SE04下層(中))        |                             |

## 第V章 総 括

八ヶヶ山A遺跡は、主に鎌倉時代の集落跡である。遺構は溝・井戸・土坑・ピットなどを確認した。遺跡の中心は調査区中央部及び西端付近で、東側で検出した遺構は土坑1基のみである。東側は西側に比べ地山の標高が高く、削平による遺構の消失の可能性が低いことから、集落の広がりがなかったと考える。また遺構の時期は、遺物を伴う遺構が少ないことから、覆上の共通性などを基本として全体的に判断した。

調査区中央部では西北西-東南東に延びる大溝SD09、井戸SE04や道路側溝と考えるSD02・03などの遺構を検出した。大溝SD09は浅く幅広の部分と、深く掘削される部分の2段に落ちる構造である。SD09の時期は遺物が上山しなかったため不明確であるが、中世や古代の遺構と覆土が異なり、軸方向も他の溝と大きく異なる。井戸SE04は底部から吉岡編年Ⅱ期・Ⅲ期の珠洲が設置された形で出土しているため、井戸の開削および存続時期の中心は13世紀であると考えられる。井戸は素掘りであったが、その形態は時代や集落の性格と同時に地山の性質に拠る部分も大きく、地山が粘土質の場合は中世でも素掘りのものが主体である。本調査区の地山は固くしまった粘土質であり、素掘りで十分であったと考える。当遺跡の南西0.5kmに所在する八町Ⅱ遺跡で検出された中世の井戸54基のうち約95%が素掘りであることも、これを裏付けている。一方、珠洲掘鉢の設置位置が井戸最下層付近の湧水点以下、平面的に井戸のほぼ中央に正置されていたことは、開削に伴う儀礼の可能性が指摘できるが、中世における類例は確認できないが、ただ古代においては加賀を中心に井戸に伴う古代須臾器の貯蔵具の出土事例が報告されており(向井1999)、その目的として祭祀である可能性を示唆されている。

理化学分析の結果からは幾つかの知見が看取できた。第1に、SE04の下層覆土から検出された種実遺体群からはモモ、メロン、シソ属などのほか、イネ、アワ、ヒエ、コムギなど穀物類の栽培種が確認され、穀物類は炭化するという特徴がみられる。八町Ⅱ遺跡でも同様の分析を行っており、同様に栽培種の炭化物が多量に検出されている。

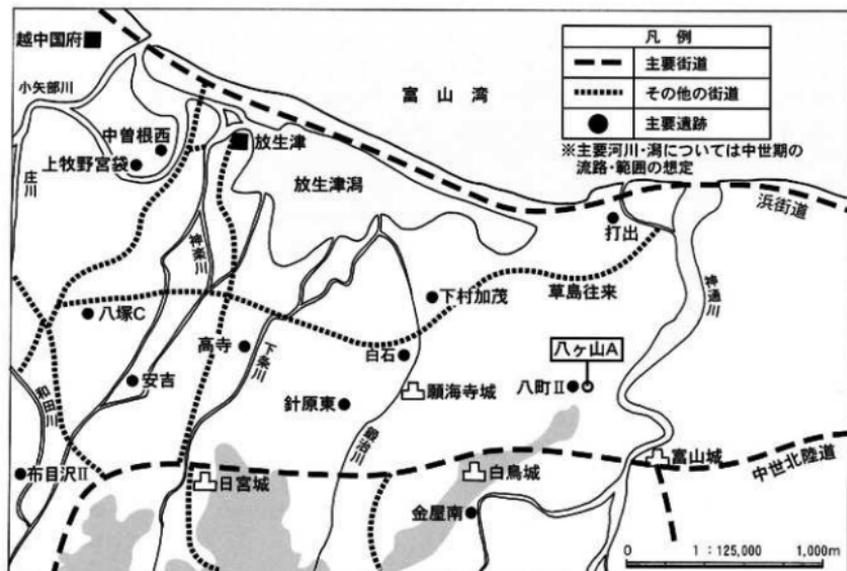
第2に、SE04の下層に設置された珠洲掘鉢の中の覆土(土壌サンプル②)の微細物分析の結果、エノコログサ属の果実156点(完形100点、破片56点)とイネ科の果実が96点(完形86点、破片10点)と多出していた。珠洲を挟む形で堆積している覆土(土壌サンプル①・③)からの検出が皆無であるのに比して特化して多いことから、珠洲と同時に埋納された可能性が高いと考える。エノコログサ属は栽培種ではないが、粟の原種であるため食用とすることができる。また現在は別種として扱われているが、変異種としてアワがある。イネ科は600属1万種が属する科であるため、今回の微細物分析の結果からは食用可能かどうかなどの具体的な有用性が判断できない。

また、井戸内で確認されたイネなど穀物類の栽培種が炭化しているのに対し、珠洲掘鉢中の穀類が炭化していなかったことは、何らかの儀礼に伴って埋納された可能性を示唆している、他の調査では類例を確認できなかった。一方、八町Ⅱ遺跡の井戸SE16最下層覆土の微細物分析結果では、200ccの試料中にアサの種子が1606個と多量に検出されており、植物の種子と果実という相違点はあるが、関連性が感じられる。

理化学分析による古環境の復元では、当遺跡の木木や草本などの検出結果は八町Ⅱ遺跡の分析結果とで同様の傾向がみられる。両遺跡ともに当該時期には草地が形成され、イネ、コムギなどの穀物種を中心に栽培・利用していたと考えられる。

歴史的・位置的環境からみても、当遺跡は南側の中世北陸道と海沿いの浜街道の間に位置し、両者の間は草鳥往来などの脇街道によってつながれていた。また北西約10kmには日本海海運の拠点港湾として中世期を通じて発展した放生津が存在し、放生津湾も現在よりも東側に広範囲に広がって

たことが知られている。文献資料によると当地域は倉垣荘の西方、寒江荘の推定地に含まれており、地学的には日本海海運の拠点の港湾であった放生津の後背地として位置づけられる。当遺跡の調査結果から、集落の中心が調査区の西方に広がっている可能性が高いことが取次でき、西南約0.5kmに同時期の拠点集落であった八町Ⅱ遺跡が存在することから、その外縁部であった可能性が高いと考えられる。八町Ⅱ遺跡の調査結果では（富山市報告2008）、当遺跡との間の地域は、ほ場整備工事や水田耕作などにより遺物包含層や中近世の遺構面が削平されたと考えられており、この地域一帯に鎌倉時代～室町・戦国時代の集落が広がっていた可能性が高いといえよう。



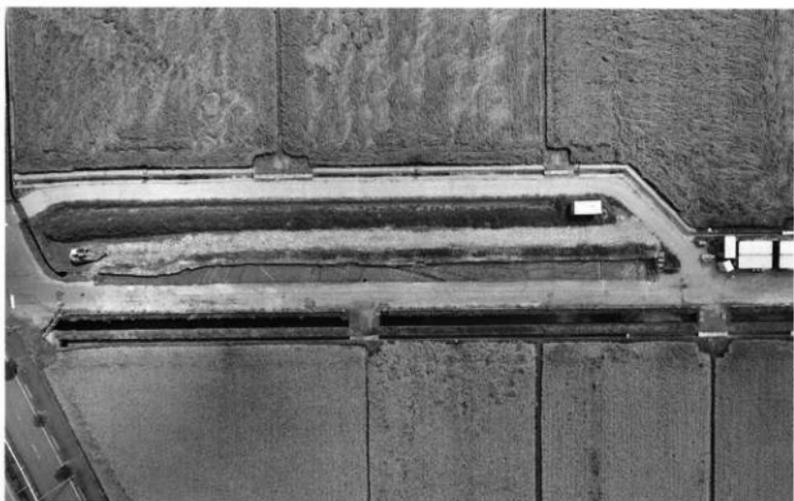
第9図 中世期における八ヶ山A遺跡の位置と周辺の主要遺跡

参考・引用文献

- 鐘方正樹 2003『井戸の考古学』同成社
- 向井裕知 1999「井戸における貯蔵具の使用」『北陸古代土器研究第8号須恵器貯蔵具を考えるⅠ つばとこめ』
- 北陸中世考古学研究会 2001『中世北陸の井戸—第14回北陸中世考古学研究会資料集—』
- 北陸中世考古学研究会 2008『北陸中世のみち—第21回北陸中世考古学研究会資料集—』
- 富山市教育委員会 2005『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅵ—百塚住吉D遺跡・打出遺跡—』
- 富山市教育委員会 2009『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅳ—水櫃上砂子坂遺跡・小竹貝塚—』
- 富山市教育委員会 2008『富山市八町Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2007  
『岩坪岡田島遺跡・手洗野赤浦遺跡・近世北陸道遺跡発掘調査報告—能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅵ—』
- 富山地学会・第一港湾建設局伏木富山港工事事務所 1964『放生津周辺地学的研究』
- 金三津英則・松山充宏 2008「中世放生津の都市構造と変遷」『港湾をともなう守護所—戦国期下町の総合的研究—北陸を中心に—』 2005(平成17)年度～2007(平成19)年度科学研究費補助金(基礎研究(B))研究成果報告書



調査区遠景(北東から)



調査区全景(上が南)



SD01 遺物出土状況 北西から



SD02・SD03 完掘 南から



SD06 完掘 南から



SD07 完掘 北から



SD08 完掘 南から



SD08 断面 北から



SD09 断面 北西から



SD09 完掘 南東から



SD09 全景 北西から



遺構掘削作業状況 北西から



SE04 断面 南から



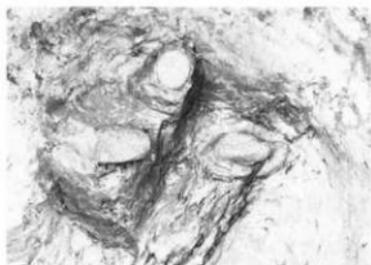
SE04 遺物出土状況 南から



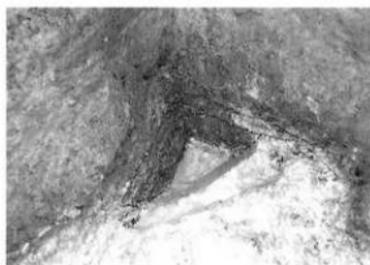
SE04 出土遺物 南から



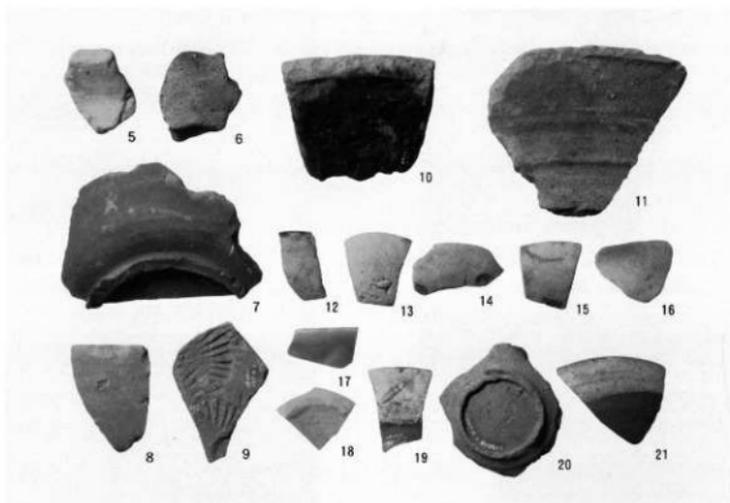
SE04 遺物出土状況 南から



SE04 自然礫出土状況 南から



SK18 断面・完掘 北東から



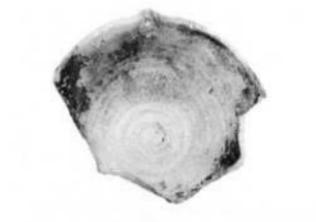
出土遺物



SD01 出土遺物



SD07 出土遺物



SE04 出土遺物



SE04 出土遺物

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	とやまははっかやまえーいせきはくつちようさほうこくしょ							
書 名	富山市八ヶ山A遺跡発掘調査報告書							
副 書 名	基幹農道（呉羽和合4期地区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	40							
編 著 者 名	鹿島昌也 朝田 要							
編 集 機 関	北陸航海株式会社							
編集機関住所	〒933-0866 富山県富岡市清水町3-4-40 TEL 0766-22-4217							
発 行 機 関	富山市教育委員会 富山市埋蔵文化財センター							
発行機関所在地	〒930-0091 富山県富山市愛宕町1-2-24 TEL 076-442-4246							
発 行 年 月 日	西暦 2010年3月24日							
ふりがな	ふりがな	コード						
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
はっかやま 八ヶ山A遺跡	富山市 八ヶ山地内	16201	201110	36度 05分 04秒	136度 58分 02秒	20090824~ 20090924	285	基幹農道 (呉羽和合4期地区) 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
八ヶ山A遺跡	集落跡	平安		溝		縄文土器、土師器、須恵器、 珠洲、青磁、白磁、越中瀬戸、 唐津、叩石、磁石		
		鎌倉		井戸、道路状遺構、 溝、土坑、小穴				
要約	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査区西端で9世紀の土師器を伴う溝を検出した。周辺部に古代集落が存在したと考える。</li> <li>中世では道路側溝の可能性が高い平行に延びる2本の溝および珠洲溜鉢を底に正置した井戸を検出した。</li> <li>西南0.5kmに所在する中世の拠点集落である八町II遺跡の外縁部であったと考える。</li> </ul>							

富山市埋蔵文化財調査報告40

### 富山市八ヶ山A遺跡発掘調査報告書

基幹農道(呉羽和合4期地区)整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

発 行 日 平成22(2010)年3月24日  
 編 集 北陸航海株式会社  
 発 行 者 富山市教育委員会埋蔵文化財センター  
 〒930-0091 富山市愛宕町1-2-24  
 TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810  
 E-Mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp  
 印 刷 株式会社 チューエツ

